

平成27年度 学校評価 自己評価書

あま市立秋竹小学校

1 総 括

(1) 教育目標（学校経営案より）

学習指導要領の基本理念をふまえ、児童のすぐれた個性を伸ばし、個を生かす教育活動を通して、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな児童の育成を図る。

<めざす児童像>

- | | |
|-------|-----------------------|
| ○ 強く | 自他の生命を大切にし、たくましく生き抜く子 |
| ○ 正しく | 自ら学び、正しく判断できる子 |
| ○ 明るく | 礼儀正しく、心豊かで思いやりの心をもった子 |

(2) 本年度の重点努力目標

- ア 学ぶ力を高めるため、基礎・基本の確実な定着をめざし、「わかる授業」「楽しい授業」を心がける。さらに、体験的な学習、問題解決的な学習を重視し、個に応じた指導を大切にす。また、その過程を通してコミュニケーション能力を高める指導を工夫する。
- イ 異年齢集団「なかま」活動により、思いやりの心や感謝の心を育てる。また、「読書の時間」の充実のために「読み聞かせ」を職員とボランティアで積極的に行う。
- ウ 外遊びを推奨し、体育的行事を計画的に実施するとともに、家庭の協力を得ながら正しい生活リズムづくりをはじめ基本的な生活習慣の育成に努める。
- エ 「あいさつ運動」をはじめ、諸行事を通して教師が児童に寄り添う中で、児童理解を深め、心のつながりを大切にすした学級・学校づくりに取り組む
- オ 定期的な安全点検以外にも、遊具の安全な使用方法や廊下歩行の安全指導など、安全な学校環境づくりに努める。対応マニュアルを常に見直し、避難訓練を行う。
- カ 学校評価や個人懇談の実施、ホームページの更新、学校通信の発行、外部講師の招聘・行事へのPTA協力等を通して、学校を地域に開き、家庭・地域との信頼関係づくりに努める。

2 自己評価の実施体制

- (1) 調査時期 平成27年12月11日～21日
- (2) 調査項目 別紙アンケート参照
- (3) 調査対象 有効回答者数／対象者数
- | | | | |
|------|------------|---------|--------|
| ・児童 | 148名／全148名 | ・学校評議員等 | 9名／全9名 |
| ・保護者 | 140名／全148名 | ・教職員 | 8名／8名 |
| | | 計 | 305名 |

3 調査結果

別紙アンケート結果参照

4 考 察【児童・保護者・教職員・地域等の総括的考察】

- (1) ほとんどの項目において、数値としては大きな変動はなく、児童・保護者・教職員の達成状況A（肯定的な回答の割合が80%以上のもの）の項目数の変化も少ない。児童の評価においては、評価を判断する数値がほとんどの項目において昨年度より少し上昇しており、保護者・教職員が地道に努力を重ねてきた結果であると考ええる。
- (2) 児童・保護者に共通して達成状況が下がった項目はない。昨年度評価が下がった「学校であったことを家でよく話す」の項目は、評価をAに上げることはできなかったが、児童の数値は若干上昇している。
- 「学校の目標を知っている」の項目においては、保護者・教職員が評価を下げているにも関わらず児童の数値は上昇しており、校長講話・学級担任の取組が結果に結びついたと考えられる。また、「決められた仕事をきちんとしている」「学校のルールを守っている」と答える児童が増えた。児童の、自己の役割に対する責任感や規範意識の高さと、それを支える教職員の熱意が伺える。
- 「友達となかよく生活している」については、低学年の数値が若干低いので、どの児童も充実した学校生活を送ることができるよう、社会性を育むための取組が必要である。
- (3) 保護者・教職員に共通して達成状況がDへ下がった項目は、「本年度の重点目標を知っている・伝えている」である。保護者評価の「学校の様子がおおむね分かる」の数値も下がっており、学校の教育方針から日常の児童の様子まで情報が発信できるよう、方法の改善が必要である。
- 「基礎的な学力が身についている」は、昨年同様、保護者も教職員もB評価である。教

職員が「個に応じた学習を行っている」と回答しているにもかかわらず、保護者はもちろんのこと、教職員自身もまた児童の学力に不安を感じている。これに対して、児童の「授業はわかりやすい」と答える数値は微増しているので、学力向上に向けて、引き続き粘り強く取り組んでいきたい。

- (4) 教職員による評価では、11項目中8項目が達成状況Aである。昨年度D評価の「自分からあいさつをよくする」は達成状況がCとなり、昨年度よりも改善したといえるが、保護者の評価が横ばいであるにも関わらず、児童の自己評価は上昇している。言われてから返す「受け身のあいさつ」ではなく、自分から進んであいさつができる児童を育成しなければならないと考える。
- (5) 保護者からは、学校の取組を評価する内容の意見とともに、改善を求める意見も寄せられている。今年度の取組の結果として現れてきた課題に対して、具体的に改善策を講じていく必要がある。

5 成果と課題

<成果>

- (1) 「学校は楽しい」と答える児童や保護者は9割を上回っており、本校の伝統的な「なかま活動」により、どの学年の児童も、達成感や充実感を味わうことで生き生きとした学校生活を送っていることが伺われる。また「仕事をきちんとする」「ルールを守る」という児童が多いということは、好ましい学級経営が行われている結果であり、児童一人一人が互いに信頼しながら日々の活動に取り組んでいると捉えることができる。
- (2) 「子どもの学習や生活について、担任や他の教職員に相談できる」と答える保護者は8割を超え、「子ども個々が大切にされ、認められている」の評価は9割に達し、両者とも昨年度より微増している。これは、学校での児童の様子や学校の取組についての理解を得ることができた成果であり、その結果、「教職員が熱意をもって教育にあたっている」の評価について、9割を大きく超える評価を得ることができた。

<課題>

- (1) 大部分の児童は学校生活を楽しみ、仲良く生活しているが、低学年の児童に否定的な回答をする児童がいるので、さらに心の教育の充実を図る必要がある。
- (2) どの児童も円滑な人間関係を築くことができるよう、コミュニケーション能力の向上を図りたい。
- (3) 児童たちの学習に対する意識は向上しているので、基礎学力の向上にむけて、さらに努力を重ねたい。
- (4) 教職員と保護者は連携を取りながら教育活動に当たっていると見えるが、学校生活の様子を丁寧に発信することを通して、さらに家庭・地域との連携を強化していきたい。

6 改善策

- (1) 心の教育の充実
道徳の時間を充実させ、他の教科・領域との関連を図りながら、生命尊重の心や自尊心を高め、規範意識を育てる。そして道徳の時間で指導したことが他の場面でも活かされるよう、特別活動の内容を工夫する。また、なかま活動を通して人間関係を築く力や社会性を育み、自己有用感をもたせる。学校全体であいさつ運動に取り組み、生活のあらゆる場面で自分から進んであいさつするよう習慣化を図る。
- (2) コミュニケーション能力の向上
学校生活のさまざまな場面で「話す」「聞く」「話し合う」活動の場の設定を工夫し、「自分の思いを的確に伝え、相手の思いを共感的に受け止める」という伝え合う力の向上をめざして継続的に取り組んでいく。また、周囲と温かい人間関係を築くための適切な言葉遣いについて、日常生活全般において指導する。
- (3) 基礎学力の向上
児童一人一人の実態を十分に把握し、より効果的に支援することができるよう、TTによる指導や教育支援員の配置を実態に即して行い、個への支援を進める。ICT機器の活用などにより、どの子もわかる授業をめざすとともに、家庭と連携して、学習内容の定着を図る。また、教員の授業力向上のための研修の機会を設け、年間を通して計画的に研修を進める。
- (4) 家庭・地域との連携の強化
ホームページ等を通して、学校の教育活動や学校としての重点的な取組を家庭や地域に発信する。学校行事の機会には保護者アンケートを実施し、学校に対する要望や意見を把握し、次年度の計画に活かす。さらに、学校評議員・民生児童委員の方々からも地域のご意見をいただき、日々の教育活動に反映させていく。また、担任から家庭への連絡を密にするとともに、懇談の機会を増やし、保護者との会話を大切にしていく。